

## 枕草子研究の動向と展望

— 史実考証研究の視座から —

赤間 恵都子

## はじめに

枕草子という作品は平安女流文学の傑作の一つとして掲げられながら、研究史上では長い間、享受者の好悪によって両極端の評価が与えられてきた。その原因として第一に、枕草子の内容および形態が独特のものであり、近しい時代の現存作品中に類を見ないということが挙げられる。一つの作品以前に同様な作品がない場合、その作品は文学史上に先駆者としての地位を与えられるのが普通である。しかし枕草子の場合、後に続く作品もない。無論、十五世紀に正徹が『正徹物語』に「つれづれ草は枕草子をつぎて書きたる者也」と述べたことに始まって、枕草子は『徒然草』に先んずる作品として扱われ、『徒然草』研究の上で比較対照されることはある。そこから飛躍して、随筆文学の先駆であるという見方もされている。だが、枕草子執筆から四世紀半も経過して書かれた作品から遡っての、この便宜上の位置付けは到底願けるものではない。

このように文学史における位置付けの不安定なこと、したがって評価の基準が定まらないことが、枕草子について論ずる研究者たちの意見の食い違いを招いてきた。五十嵐力がその著作の文学史に「大空に孤高を持したる枕草子」という項目をたて<sup>①</sup>、玉上琢彌が「枕草子は文章の何たるやを知らない女のおしゃべりだ<sup>②</sup>」と書いた

のは、枕草子という正体不明の作品に対する正反対のとらえ方を象徴した典型的な例だろう。この問題は作品論の方向から考え直されるべき最終的な課題として残されている。

枕草子の評価に際してはもう一つ、特に日記的章段に絡む問題が提出されてきた。それは、作品と史実背景を考え合わせてみるときに生じる矛盾の問題であるが、枕草子の場合、作品から受ける明るさと史実背景から推測される暗さとの差があまりにも大きく目立つのである。従来、この問題はすぐさま作者の精神あるいは生き方の観点からの考察にすり替えられてきた。それも当然で、枕草子論としての始まりは、明治期の紫式部との対比による清少納言性格論だったのである。これについて枕草子作品論の研究の流れをたどりながら見ていくことにしよう。

## 一、作家論か作品論か

明治二十三年発行の三上参次、高津敏三郎共著の文学史<sup>③</sup>では、「此ノ紫清二女、共に当時無双の閨秀にして、学問の博き、氣韻の高き、互に相伯仲して、其間に軒輊をなしたがたし。されども、其人物に至りては、一（紫式部（筆者注））は既に前に云ひしごとく、溫柔貞淑にして、德行ある婦人の龜鑑なるが故に、其文章にあらは

れたるところ、自づから其風あり。他はあまり今様にして、内行も修まらず、且つ才学に誇ること常なり。…(中略)…源語よりは、其性質の相似たる『紫式部日記』を以て、『枕草子』と比較するに、一方は、温厚静肅の出来多くして、格別飄然たる妙味なく、他方は逸気奔放、奇抜なること多くして、巻を掩ふ能はざらむ。この人物の差異、外にあらはれて即ち、文章の差異となれるがごとし。」と述べられている。紫式部との対比論の典型である。

さらに十五年後に発行された藤岡作太郎の『国文学全史』<sup>④</sup>では、「……されば少納言の性、あくまで俗界に浮沈し、己をのみ立てて、他人のことには思ひやりなく、矯飾の念類齢に至るまで抜けず、主家の不幸、一身の零落は思ひやるだに苦痛を感じ、すべて今の有様を見聞かじとて、翻へりて昔の歡樂の夢をせめてもの思ひ出とせしものにあらずや。かくの如く、過ぎ去りし榮華を恋ひて、現在に安んずる能はざる人の一生は、いかに悲惨なるものぞ。」と述べられる。こちらは紫式部日記の清少納言評を連想させる。いずれも清少納言の性格を念頭においた一面的な見方といえるが、このような論が昭和初期に至るまで枕草子論を強く支配していたのである。

さて、昭和十年代に入って、先に引用した五十嵐力が枕草子に最大級の讃辞を贈ったのを皮切に、異本研究および成立論の側から枕草子に取り組んだ池田龜鑑と、『校本枕冊子』で大きな功績をあげた田中重太郎が清少納言に高い評価を与えた。両氏は、中宮定子と運命を共にした清少納言の精神を崇め、称賛して、池田の方は枕草子を「崩れゆく權威への挽歌」と名づけ<sup>⑤</sup>、田中は、「その本質は、清少納言の宮廷奉仕の讃仰録」と述べている<sup>⑥</sup>。清少納言および定子に多分に同情的な両者のとらえ方は、以前の清紫対比論と反対の立場からの、それと同程度に一面的な見方であるという印象を免れ

ない。

また、清少納言の伝記研究の業績で著名な岸上慎二も、作品については、「この日記的文章は…(中略)…その主人公である定子皇后に奉呈するつもりで執筆していることを感ずる」<sup>⑦</sup>と触れる程度であり、史実背景との問題については、「少納言の人生体験なり、その体験を通して形成してきた自己の資質が、やはり陽性の人間であったため、陽性の事件記述に材料の選択なり表現が集中してしまひ、陰湿な政争の結果のなまなましい現実が文学として造型しえなかったのではあるまいか」<sup>⑧</sup>と述べ、性格論の域を出ていない。池田、田中、岸上諸氏のような枕草子の本格的な研究者たちでさえ以上のような見解にとどまっている状況を見ると、枕草子研究の流れの中で作品論が最後まで取り残されてきたことが知れるのである。

ところで、池田、田中、岸上らを中心に枕草子研究が進められていたのと同じころ、昭和二十年代に西郷信綱が宮廷女流文学の作者の社会的地位を問題にした論文<sup>⑨</sup>を発表した。西郷は、「とにかくこのように式部と清少はそれぞれ資質にかけても個性的であり、その作品の色あいもかなり違っていた。そうしてここに俗論的に、清少・式部の印象主義的対比論が春秋争いのように提起されてくる理由が存するのであるが、しかし作品の肌ざわり、皮膚感覚のみをかく愛撫し享受しているだけでは、平安女流文学の全体構造はついに批判的に把握されないのであらう」と述べて、従来の作品論を的確に批判した。そして、「彼らの生存を歴史的・階級的に規定し、その精神を文学の制作に志向せしめた類同の契機・時代的公約数ともいうべきもの」を考える必要性を提唱し、考察したのである。

清少納言については、「清少納言はその世界における自己意識した悲劇的喜劇役者であった。あの明るい「をかし」の背後には自己

をひきさかれた、そしてそれを逆の方向で統一しようとしている、だが統一されつくせぬ悲劇がある」<sup>10</sup>と述べ、作品の奥に存在する作者をとらえようとしている。一方、社会的見地からも紫式部に對してはより高い評価を与えた源氏学者たちの、清少納言への評価は手厳しかった。

阿部秋生は、「枕草子は事実以上に彼女を当代女房の第一人者に描いてしまっているのではなかったろうか。…(中略)…彼女の一切の言動を肥後守元輔の娘の猿樂言——咲ハスルヲ役トスル」言動としてしまうのは行きすぎであるかもしれないが、中宮の御前を色彩する受領の娘以上には、評価されていなかったのではあるまいか」と書き<sup>11</sup>、秋山虔は、「…：不如意な中流官僚清家の出身でありながら、わが出自を裏切つて成り上がり、典型的な宮廷女房になりきつてしまった。つまり自分におおいかぶさる社会の矛盾に立ち対うことなく器用に回避し、宮廷的通念のすぐれた代弁者として自己を定立したのであるが、…」<sup>12</sup>と述べた。社会的存在としての清少納言像と枕草子に描かれた清少納言像との食い違いが、新たな批判的見方を招いたのである。西郷信綱さえ、後に「清少納言は機敏な目をもっていたが、宮廷世界に生きる自分を対自化する目をもっていなかった」と、先の論を改稿するに至っている<sup>13</sup>。

以上掲げてきた論考においては、枕草子論がそのまま清少納言論として論じられる傾向が見受けられた。作品を高く評価する研究者は作者を祭り上げ、作品を低く見なす研究者は作者をおとしめる結論を導いている。西郷信綱が改稿する前に述べていたように、作品の背後にある作者としての清少納言の存在を認識することが、枕草子論にとって必要だった。<sup>14</sup>

## 二、枕草子本質論へ

西郷信綱が宮廷女流文学の問題を提起したのと同様、昭和二十四年の十二月に石田穰二が、源氏物語論の中で枕草子を取り上げている<sup>15</sup>。そこでは源氏物語と比較して「この草子の感覚が本質的にいはば費者的である」「むしろはつきり云へば、これ等の文章は、内容的には何も書かれてゐないに等しい」と、否定的な見解が述べられる。この論は源氏物語の優秀さを称える結論になっているが、源氏物語との「対立の独自さをきはめる事がおそらく枕草子論の骨子とならねばならぬと思ふ…」と書いていることで、石田の枕草子研究の出発点であつたと思われる。石田はその後、池田龜鑑の研究を読んで、「草子全体を随筆と呼ぶ今までの考へを内容的に検討しなかつた」ことを反省し、「枕草子のやうな文芸の成立を、当時の歴史的関聯の中に如何に位置づけて考へるか」という課題を提出して、枕草子取り組みへの姿勢を見せた<sup>16</sup>。

時期的に前後して、枕草子を「歌のない説話文学」<sup>17</sup>と述べた野村精一が、さらに「中関白家の語り部の文学」という注目すべき論を立てている<sup>18</sup>。野村は、「この枕草子の所謂公的性格とも言ふべきものは、宮廷女流文学乃至女房文学に通用するものであつたようである」と述べる。これは、昭和年代初めに民俗学者折口信夫が、平安時代の女房日記のもともとの性格を公のものと考え、枕草子もまたその中に含める立場から、「これは単に清少納言が拝領したのではなく、中宮から、おあづかり申して、中宮の為にまくらごとを選りして、かきつけやうと考へたのだと見るのが、正しからう」<sup>19</sup>と述べた考えに通じるものと思われる。

石田や野村の論がこれまでの研究と異なる点は、枕草子に登場し

ている清少納言のイメージから離れ、枕草子という作品の本質に挑んだところにある。続いて、塚原鉄雄がやはり枕草子を随筆文学とすることへの反論提唱から、文学作品の本質把握のための三つの条件として、「作者の規定・読者の享受・作品の内容」を掲げて論じた<sup>20</sup>。そのうえで、「すなわち『枕草子』は本質的に後宮女房の生活記録なのである」と述べ、また、「清少納言が時間的進行の形式を採用しなかった理由は、意識的な合目的性を基盤として視点と視角とを固定的に定着する態度を固守したから」と推測している。

この後、枕草子の作品としての特異性をさらに強く押し出し作者の個性を消すに至ったのが、先に課題を提出していた石田穰二である。石田は次のように述べる。「女房の仰せ書きというものがある。……(中略)……女房が主人の「仰せ」を伝達するという書式である。枕草子の日記的章段の多くは、まさしく、この仰せ書きに相当するであろう。これはつまり、筆録者たる女房にとって「公」の事に属する。」<sup>21</sup>そして、「そこにあるのは正の世界だけで、負の世界はきれいに切り捨てられている。きびしい選択の目が働いていたと見るよりほかなく、定子が定子である所以のもの、中宮に体现されていた、作者にとって価値ある世界―それは女房にとって価値ある世界ということであるが―それしか作者は書こうとしないのである。

『枕草子』を後宮の文明の記録と見る所以である」と書く<sup>22</sup>。野村精一の先の論に、「常に栄光に満ちた中関白家の歴史的記録であって、現実には、例えば栄華物語がどのように彼らの悲運を描いても、「枕草子」という作品に於ては、それを描き出してはいけないのである。」とあったのに類似するが、野村は後に、自論が石田穰二の論と同様に扱われることについて、「わたくしは枕草子の文体の中に、いわゆる類集の方法のみならず、〈語りの方法〉が大きな役割

を(それは主として日記回想部だが)占めていると考え、その説明として、枕草子が〈公的文学〉であると述べたのであり、……(中略)……わたくし個人としては、もちろん清少納言の個性を全面否定する意図はない」<sup>23</sup>と説明している。

一方、枕草子の国語学的研究の方も、石田がこの論を発表した昭和四十年頃から詳細に進められるようになった。枕草子の文章が短く簡潔なものと印象的に見ていた従来の考え方に對し、「一見そのように見えてもその実低回した表現がとられ内省が隠されている」と提言したのは根来司である<sup>24</sup>。根来はさらに、清少納言の仰せ言傳達の姿勢を指摘して、枕草子の公的性格を国語学の方向から裏付けた<sup>25</sup>。この論は石田の論と相俟って、枕草子に對する従来の見方を決定的に揺るがせたといえるだろう。

### 三、作品論と史実考証研究

以上に見てきたように、明治から昭和四十年代前半までの研究史は清少納言の性格論に始まって、作者の個性をまったく否定する論を見るに至った。枕草子の作品論としての研究が本格的に始まるのはこの後である。まず第一に、これまで不十分だった作品自体の読みを深めようという研究方向に向かうことになる。そうして見出された一つの方法は、枕草子が形態的に内蔵している「語り」の構造を解くことであった。安良岡康作は「清少納言の自讃をめぐる「語る」言語活動の所在を指摘し、またそれを媒介とした、「語る」文学的作品の存在が認められること」を提唱した<sup>26</sup>。久保木哲夫はさらに自讃談の詳細な検討から「作者自身は何も言わずに、ほめ言葉は、人々の口を通してする」ことに着目し、「その方法を支える基

盤は、作者の生きた時代が確実にもっていた」と考えた<sup>27)</sup>。このよ  
うな「語り」の考察は、枕草子に見出された公の場の記録的性格と  
も関わり、また枕草子を同時代の他文学と結ぶ可能性も秘めていた。

しかし「語り」論が盛り上がる前に、本文の読解上必要な、より  
直接的で分かりやすい別の研究方法が注目されるようになる。それ  
は史実と作品を対照させることによって、作品の背景から読みに迫  
ろうという方法であった。その基盤となる枕草子の史実年時考証研  
究は、早くに三巻本や前田家本に書き入れられた勅物・勅註に行わ  
れながら、以後はそれを踏襲するにとどまり、長い間研究対象とし  
て陽の目を見なかった。もっとも枕草子という作品自体が研究対象  
として取り上げられなかったからでもあるが。しかし、鎌倉時代の  
『無名草子』に、「その枕草子こそ、心のほど見えて、いとをかしう  
侍れ。さばかりをかしようも、めでたくもあることども、残らず書き  
記したる中に、宮のめでたく盛りに時めかせ給ひしことばかりを、  
身の毛も立つばかり書き出でて、関白殿失せ給ひ、内大臣流され給  
ひなどせしほどの衰へをば、かけても言ひ出でぬ……」<sup>28)</sup>と書かれる  
程度のことは早くから周知されていた。『無名草子』はこれを清少  
納言論として述べ、こういう態度で枕草子を書いた清少納言を、  
「いみじき心ばせなりけむ人」と評価して、さらにその後の清少納  
言の零落について「いとあはれなれ」と述べる。先に見た明治以降  
の清少納言論は無名草子のこの文学的な思考を受け継いだと見るこ  
ともできるだろう。

本格的な史実考証研究は作家論や作品論とかかわらない形で、明  
治四十二年、坂元雷鳥によって初めて提出された<sup>29)</sup>。大正十年には  
金子元臣が、『枕草子評釈』（明治書院）のくわしい注の中に史実考  
証も取り入れて、これを年表にして付けた。昭和十年代に入ると小

沢正夫が考証論文を発表し<sup>30)</sup>、次いで岸上慎二が古註と坂元、金子、  
小沢らの説を掲げたうえで、自説として七十二段に及ぶ章段を扱っ  
た<sup>31)</sup>。以後、昭和年代の枕草子研究に史実考証は不可欠のものとな  
り、注釈書には必ず年表が付されるようになった。

作品内に偏在している日記的章段の史実背景が明らかに対照され  
るようになると、当然のなりゆきとして、史実と作品世界との関係  
が見直されてくる。それまでは清少納言が主家の悲劇を描かなかっ  
たという大ざっぱな観点に立ってその理由が論議されていたのだが、  
具体的に各章段に何が描かれているかが検討されるようになった。  
森本元子は章段を事件年時によって分類し、全体として枕草子が何  
を描いているかを考察した。また、主要な章段を取り上げ、事件年  
時や執筆年時に関しても解説を加えている<sup>32)</sup>。藤本一恵は個々の章  
段に歴史史料からの詳細な検討を加え、特に長保二年の史実を背景  
とした章段に深い読みをもたらした<sup>33)</sup>。さらには漢文日記を史料と  
して枕草子周辺の歴史背景を考察した研究集成が下玉利百合子によっ  
て出され、史実考証研究も精緻を極めることになる<sup>34)</sup>。

このような流れの中で、史実考証から照射される枕草子の作品像  
について提唱したのは萩谷朴である。萩谷は、「枕草子の中に、皇  
后乃至中関白家の衰運に対する哀傷を全く残していないとは云いき  
れない……その文面に表れた僅かな傷口から覗き得る彼女の悲嘆哀惜  
が、如何に深刻なものであるかを、われわれはむしろ察知すべきで  
ある」と述べ、枕草子を「悲哀の文学」と呼んだ<sup>35)</sup>。作品に残され  
た史実の痕跡を感じ取り、そこから枕草子の悲哀を積極的に読みと  
ろうとする姿勢である。その後、萩谷は枕草子の章段配列に作者の  
意図的な作為を想定する画期的な注釈書<sup>36)</sup>を世に出し、「悲哀の文  
学」としての考えもエスカレートさせていくが、作品本文が語らな

い部分に対する史実的考察の試みは興味ある作品論を展開させ、停滞していた枕草子研究を進展させる突破口を開いたといえる。

続いて三田村雅子が、枕草子の「あはれ」の欠如について、「単に作者の性格・資質の問題に帰すべきことではなく、「あはれ」の追放、歪曲を選んだ作者の姿勢の問題としてとり上げなければならぬ」と提言し<sup>⑧</sup>、作品の背後にある書かれざる史実を探りながら次々と新しい本文解説を繰り広げていった<sup>⑨</sup>。三田村の研究方法は作品と史実とのずれを枕草子の虚構としてとらえ、作品中に作者の自律した表現世界を積極的に読み取っていかうとするものであり、その方向は以後の枕草子研究の一時代を担っていく。

ところでやや前後するが、萩谷が『悲哀の文学』を提唱したころ、仲田庸幸が史実上の悲劇的狀況に反する枕草子の明るさに疑問を投げかけ、作品の鍵語といえる「笑い」を指摘している<sup>⑩</sup>。仲田は「作者が強い明るい面をのみ回想し、「笑ふ」表現によってそれに堪えようとしたのではないか」と考察、その要因を作者の外剛内柔な性格に帰すにとどまったが、その後、「笑い」を軸に章段の年時の差異に沿った表現方法の違いを明確に指摘した原岡文子の論<sup>⑪</sup>が登場する。原岡は枕草子の日記段を関白道隆の死を境に前期章段と後期章段に分けて比較検討しており、これが史実考証と作品論を結ぶ有効な研究方法として研究者達に広く受け入れられ、以来、様々な面からの分析がなされるようになった。<sup>⑫</sup>

たとえば、史実背景に則った章段スタイルの変化を木目細やかに分析した田畑千恵子の諸論考<sup>⑬</sup>、年時による和歌表現の変化について考察した大洋和俊の諸論考<sup>⑭</sup>、回想の叙述表現に着目した松本邦夫の諸論考<sup>⑮</sup>などが掲げられよう。枕草子の日記的章段が記事年時に沿って表現方法に位相を示すという事実、現在、はほぼ認めら

れており、それに則った研究がさらに進められている状況にある。史実考証と作品論の融合によって、史実と照合した本文読解という新たな視点が投げられ、読みに飛躍的な深化がもたらされたといえるよう。

ところで、この有益な研究方法にも問題点は残されている。まず、枕草子本文の記述と史実とが合わない部分の問題である。特に中関白家の歴史的な不穩期における登場人物の官職のずれや、中宮周辺の状況描写の不自然さが指摘されている<sup>⑯</sup>。当該部分で作者が史実を故意に曲げて記述しているとすれば、作品論としてさらなる考察が必要な課題である。また、本文に直接記されていない史実をどこまで読みとることが可能かという問題も大きい。類聚段「ねたきもの」に挿入された日記的部分について、本文が言及しない関白道隆薨去の史実を読み取り、枕草子の虚構の方法を論じる三田村雅子<sup>⑰</sup>と、それに疑問を呈した坏美奈子<sup>⑱</sup>との論争<sup>⑲</sup>は、いわゆる史実読みの限界を示すものだろう。史実と作品の関係に対する研究者の考え方によって本文の読みがまったく異なってくるのである。枕草子という作品は、本来的に史実読みを排除していると考えられるのかもしれない。

実際、史実的資料の裏付けをもとに読みに徹しようとしても作品本文から読み取れる史実には限界がある。最も基本的な各章段の年時考証でさえ、本文中に根拠の希薄な章段については内容的に関連があると見られる他の章段との結びつきに年時の根拠を求めることになる。文献学的な研究に始まった史実考証が必然的に作品論の範疇へと進入するに至って、史実考証を論拠にしていた作品論は立ち往生せざるを得なくなるのである。史実考証研究がその限界を迎えつつある現時点では、作品論も新たな方法を模索するしかない。作

品の背後に大きな史実を背負いながら清少納言がどのように執筆方法を探っていたかという課題をかかえ、史実考証の対象にならなかった章段や日記段以外の章段も射程に入れて、個々の章段構造を分析することが必然的な研究方向となっていた。

#### 四、章段構造分析と「語り」論

枕草子の特質として既に注目されていた「語り」の問題は、個々の章段の構造分析上、研究対象の範疇に大きく入ってこざるを得ないテーマであった。「自讃談」「歌語り」「をこ語り」等の様々な論考がなされる「語り」の研究には、「語り」が行われる具体的な「場」を取り上げて論じる方向と、作品中の「語り」の分析から作品構造を論じる方向がある。

前者の研究では大洋和俊の論<sup>④</sup>や石井正巳の論<sup>⑤</sup>に見られるように、清涼殿の段の「歌語り」が注目され、古今集との関係から王権論につながる傾向がある。日向一雅の論<sup>⑥</sup>は、枕草子冒頭の三段を取り上げて一条朝を聖代とする証を考察した王権論の最たるものといえるだろう。高田祐彦の論<sup>⑦</sup>は、王権論を作品の方法の問題にずらして論じ、「村上朝の文化を基準として定子後宮が語られるのは：過去とのつながりによって時間の安定を図ること」だと指摘する。

後者の研究は様々な広がりを見せる。前節で原岡論が注目した「笑ひ」を「語り」との密接な関係でとらえて作者の執筆姿勢の変化を見る三田村雅子の論<sup>⑧</sup>、先の王権論とは別に枕草子の歌が「語り」に支えられて初めて意味を有すると論じる大洋和俊の論<sup>⑨</sup>、自讃談の作品構造を分析した針本正行の論<sup>⑩</sup>、橋則光との交流や三条宮での定子との贈答を「歌語り」の構造を軸に解く藤本宗利の論<sup>⑪</sup>、

定子晩年の章段の語りの方法を分析する田畑千恵子の論<sup>⑫</sup>等があり、個々の章段分析が旺盛に進められている。

「語り」の問題に限らず枕草子の個々の章段の読みを深めていく研究は近年盛んになっている。たとえば日記段を中心に、小森潔が枕草子を「表現の場」としてとらえた様々な読みの試みを進めており<sup>⑬</sup>、古瀬雅義は章段構成や典拠にあくまで作者清少納言の意図を讀みとろうとする方向で進めている<sup>⑭</sup>。超越ながら筆者自身の研究も史実考証に沿った章段分析を経て、個々の章段の構造を探る形に変わってきた<sup>⑮</sup>。また類聚段や和歌関係では、既に掲げた大洋和俊、藤本宗利をはじめ、西山秀人<sup>⑯</sup>、中島和歌子<sup>⑰</sup>、鄭順粉<sup>⑱</sup>らが精力的に章段分析を行っており、伝統的な和歌文学の枠を越える枕草子の独自の考察されている。それらの研究成果から見えてくるのは、枕草子の一章段、一章段が、それぞれ独自の論理と構成力を備え、様々な作品分析に堪える形として呈示されているという事実である。つまり枕草子はどんな読み方も受け入れる許容性を備えているということなのである。だが、そのことが返って作品全体の正体を不明確にしているとも言えるだろう。

ここで再び「語り」研究の目指すもう一つの方向が浮上してくる。それは作品全体としての枕草子の性質を「語り」の観点から分析する方向であり、枕草子とは何かという大きなテーマを論じるものである。これについて近年のものでは他の作品との関連から、「一人の個性を通してとらえた打聞集であるという意味で、歌字書の「雑談」に連なる表現の先取り」とみて、『本朝文粹』『袋草子』『十訓抄』などを視野にいれる天野紀代子の論<sup>⑲</sup>、『伊勢物語』『土佐日記』『かげろふ日記』などを経て、『枕草子』へと繋がっていく歌語り的な風流たんの系譜を想定した藤本宗利の論<sup>⑳</sup>、「『定子』をいただく

後宮』で交わされた『歌咄』とその伝承の場を記録した、一人のストーリーテラーと世間話探訪者の姿」をとらえる根岸英之の論<sup>66</sup>、そして「物語史」の視点から考察した中島和歌子の論<sup>67</sup>等が提出されている。

既成の様々な作品との関連から枕草子像を想定する論は魅力的だが、時代やジャンルを越えて掲げられる関連作品の広さがかえって一つの作品としての枕草子をとらえがたくしていないだろうか。また、抽象的な作者像の想定では作品の焦点がぼやけてしまうだろう。大きな「語り」の系譜の中に枕草子を位置づける前に、文学が内在する「語り」の奥深さを十分に検討する時間も必要だと思われる。他作品との関連ということでは、「語り」論以前に既に提起されている女房日記とのかかわりは再三検討されるべきだろう。近年では宮崎莊平に論がある<sup>68</sup>。

##### 五、跋文論と読者論——今後の課題をめぐって

枕草子の内部から作品全体を論じる際に絶対に欠くことのできないのは跋文研究と言うことだろうか。近年、跋文に関する論考が多く目に留まるのは、個々の章段分析によって拡散していく枕草子像を、もう一度、一つの作品として何とかとらえたいという研究者たちの切望の現れではないだろうか。最近の跋文研究の諸論考を紹介しつつ、今後の枕草子研究の課題について考えてみたい。

まず、伝統的な研究ともいえる「まくら」の意味をめぐる論考として、〈枕〉の連想の多義性をも検討しながらその中心に政治史的文脈を見る深澤三千男の論<sup>69</sup>、定子からの下賜の時点における「まくら」を「中宮記」を指すものとし、作品完成時の「まくら」との

〈ずれ〉を指摘する甲斐チェリーの論<sup>70</sup>が掲げられる。その他、跋文冒頭の「つれづれなる里居」の心境を随想段に読みとる岡田潔の論<sup>71</sup>、跋文の「書きつく」を、書き手の能動的な「執筆」意識と行為、或いは構えを示す言葉とする永井和子の論<sup>72</sup>などがある。跋文論は必然的に作者の作品形成に関わる問題として論じられるが、形成された作品の形態あるいは実態について論ずるものも提出されている。

まず津島知明の論<sup>73</sup>は能因本の長跋を起点に、「わが思ふ事を書く」ことを選んだ能因本独自の性向を指摘する。津島は現在ほぼ三巻本に固定化した観のある枕草子研究に疑問を呈し、異本ごとの編集意図を読みとる方向で類聚段を中心に研究を進めている<sup>74</sup>。枕草子の本質を流動的な本文形態にあるととらえる津島の研究は、作者より読者の享受を重視する方向に向かうことになる<sup>75</sup>。すでに日記段において読者論に踏み込んだ読みを展開している小森潔<sup>76</sup>は、跋文についても「その表現が読者にどのような作用をもたらすかという観点から」考察し、跋文を枕草子の読みの方向性を示す「自作語り」と位置づける<sup>77</sup>。そしてこれらの論考を受け、先に跋文に「書きつく」執筆者の意識を読みとった永井和子も『枕草子集註』の清少納言「撰者」説を掲げて、「最後には自己も他者もないこと自体が自在な『枕草子』の世界であるという認識に立ち、外部的にもこの作品の基本的なあり方を動態として把握するとすれば、必ずしも現状を固定化することなくさまざまな可能性も考え得る」と提案する<sup>78</sup>のである。

近年、枕草子研究の一つの方法として行われている読者論は、前掲小森潔の他には藤本宗利<sup>79</sup>が展開し、三田村雅子も一定の評価を与えている<sup>80</sup>。枕草子が異本間でも同一本文内においても様々な文

章形態を有すること、また史実との対照においては、語られない空白部分が指摘できることなどから、様々な読みの可能性を想像させるテキストであることは間違いない。読者論はその枕草子テキストの現状をありのまま受け入れ、意味づけるために提出されたもので、いわば枕草子の持つ許容性の広さが作者を通り抜けて読者の積極的な読みを導くことから生まれた論だと考えられるが、しかし、本当にこの作品は読者にそれほどの自由を許しているのだろうか。

日記的章段の史実考証研究から始めた私自身の想定としては、もし枕草子が読者に自由な読みを提供しているとしたら、それは容赦ない歴史的背景によって自由な読みを許されないこの作品をカモフラージュした作者の策略ではなかったかと考える。第一に日記段が時間の流れから分断され、類聚段や随想段に混じって作品内に偏在している形態（類纂形態の本にしても、日記段は時代順に編纂されてはいない形態）はあきらかに作者の作為であろう。その作為とは、跋文に述べるところの「目に見え、心に思ふことを、人やは見んとすると思ひて」等の口上とはうらはらな、精一杯の読者意識をもつて構成された枕草子の形であり、そうしなければ公表できなかった事情が為されたものではなかったか。そのように考えると、読者論は享受側の読みの限界を作品の許容性の問題に転嫁し、作品の空白を読者への委ねと意味づけて主観的な読みを展開していく論のように思えてしかたがない。それはそれなりに一つの作品享受の世界を創造する営為であろうが、古典を研究する者としては、なかなか本心を明かさぬ相手であっても、最後まで作者自身に寄り添っていたいと思うのである。

清少納言の生きた時代に立ち返って枕草子の成立事情を考察することが、作品を解読する上で第一に重要な研究態度であろう。そこ

で、作者に最も近い人物として同時代の紫式部に注目し、『紫式部日記』から考察した二つの論を紹介しよう。山本淳子の論<sup>⑧</sup>は、有名な清少納言批評を取り上げ、定子時代の文化が枕草子によって紫式部出仕時にも生彩を放っていた状況を想定したもので、枕草子執筆による当時の効果と作者の意図を推し量ったものである。甲斐チエリーの論<sup>⑨</sup>は、宮廷における清少納言を紫式部と同じ立場にあったと見て、両者に「女房外記」の役目を想定するものである。両論は枕草子内部からの考察も絡めたものであり、時代に沿った枕草子像を考える際の一つの指標として注目していいものだろう。

最後に近年、「後宮の視点によって描かれた」作品という視点からの読みを提唱した坏美奈子の論<sup>⑩</sup>に言及しておく。坏は歴史上、悲劇的にとらえられている定子サロンの内実を当事者の立場から描いたのが枕草子であるとして、後宮がどのように一致団結して歴史に立ち向かっていったか、それを描くのが枕草子の精神であると論じる。作者の位置により近づいて作品を読み解こうとする態度を評価したい。「歴史の物語が描こうとしなかった真実―定子とその後宮の精神の真実」<sup>⑪</sup>を描く作者個人の執筆精神がどのようにとらえられるのか、さらなる考察を期待したいと思う。

枕草子に限らず、古典文学作品を把握するには本文の詳細な読みが必要不可欠である。作者が書いたことと書かなかったこと、作者が選んだ題材と描いた表現の一つ一つを検証していく事こそ作品世界に近づく正当な方法であろう。それが枕草子研究者に自覚され、研究が旺盛に進められていることは、近年、枕草子の研究書が次々に出版され<sup>⑫</sup>、また初めて枕草子事典が刊行された<sup>⑬</sup>状況が示している。問題はそれぞれの研究が枕草子本文の性質にも似て拡散しがちなことだろうか。研究が詳細に進むにつれ、作品全体を結ぶ輪郭

が大きく膨らんでますますとらえ所が無くなるような気がする。個々の研究成果をどのように結びつけ、枕草子という一つの作品像を浮かび上がらせるかという総合的な視野が必要になる。

作品全体にかかわるものとして跋文研究はさらに検討されるべき問題を多く含んでいるし、それに付随して異本の検討も必要になるかもしれない。作品本文については日記的章段のさらなる考察と共に日記段や類聚段に比べて研究の乏しい随想段の検討が、内容の多様性や他章段との関連性からも注目すべき今後の課題として残されている。また作品外部からは、同時代の他の文学作品との関連の再検討作業を引き続き行っていくべきだろう。

自戒を込めて述べるなら、枕草子研究はまだまだすべき事が多く、枕草子とは何かという命題への途は残念ながらもまだ遠い。しかし、清少納言への好悪が枕草子研究に直結していた研究史初期の状況から脱し現在まで研究を押し進めてきた原動力として、枕草子に魅せられた研究者たちの情熱があったことを強く感じた。今後も作品の発する魅力が研究者を引きつけ、課題を少しずつ解き明かしてくれるように思う。枕草子とはそういう永遠の輝きを持った古典の一つなのだから。

(本稿は筆者自身の関心から主に日記的章段の史実考証研究を中心にこれまでの枕草子研究の動向をまとめたものである。類聚段随想段関係の研究をはじめ、筆者の勉強不足から私見に及ばなかった多くの研究論文、取り上げられなかった諸論考が数多くあることをお詫び申し上げる。また研究者の敬称については一律省略させていただいた事をご容赦願いたい。本稿を執筆するにあたって先行の諸研究書を参考にさせていただいた。主なものを注記⑧に付記すると共

に学恩に感謝申し上げます。二〇〇三年九月稿)

## 注記

- (1) 『平安朝文学史』(昭和十二年 東京堂)
- (2) 『源氏物語と枕冊子』(『解釈と鑑賞』昭和三年一月)
- (3) 『日本文学史』(明治三十年 金港堂)
- (4) 『国文学全史(平安朝篇)』(明治三十八年 東京開成堂、大正一二年には岩波書店より出版される)
- (5) 『全講枕草子』解説(昭和三年 至文堂)
- (6) 日本古典全書『枕冊子』解説(昭和二年 朝日新聞社)
- (7) 校注古典叢書『枕草子』解説(昭和四年 明治書院)
- (8) 『枕草子の日記的文章について』『大進生昌が家に』の場合『語文』昭和四年(二月)
- (9) 『宮廷女流文学の問題—平安文学ノートとして—』(一)、(二)『文学』昭和二十四年八月、九月)
- (10) 岩波全書『日本古代文学史』(昭和二十六年 岩波書店)
- (11) 『清少納言』(『古代の文学 後期』昭和二年 河出書房)
- (12) 『古代(後期)』(『日本文学思潮』昭和二年 矢島書房)
- (13) 岩波全書『改稿版 日本古代文学史』(昭和三十八年 岩波書店)
- (14) 秋山虔は、昭和四十年代の論「枕草子の本質」『国文学』昭和四〇年七月)では、池田、田中、両氏の指摘する「定子と清女との稀有の愛情と信頼」を認め、「清女だけでなく、中宮定子—中関白家及びその気風に順応する世界全体が、撰関時代の歴史にあやつられていたといえるのではないか」と述べて、清少納言個人への攻撃を弱め、さらに五十年代(ふ

- たりの才媛—清少納言と紫式部』『解釈と鑑賞』昭和五二年一月)には、「あの中関白家に生きた清少納言が主家の没落の悲運の経験を代償として静穏明澄な美の世界に殉じたけなげさ—その証言が『枕草子』—」と述べるまでに持論を変化させていることを付け加えておく。
- (15) 「源氏物語の聴覚的印象」(『国語と国文学』昭和二十四年二月)
- (16) 「枕草子における日本の季節美感の成立」(『解釈と鑑賞』昭和三十二年一月)
- (17) 「枕草子の論理 上・下」(『日本文学史研究』昭和二十七年四月、八月)
- (18) 「宮廷文学としての枕草子」(『文学』昭和三十二年六月)
- (19) 「枕草子解説」(『国文学注釈叢書』昭和五年)
- (20) 「枕草子の本質」(『解釈と鑑賞』昭和三八年一月)
- (21) 角川文庫『枕草子』解説(昭和四〇年 松浦貞俊との共著)
- (22) 角川文庫『枕草子』解説(昭和五一年)
- (23) 『諸説一覽枕草子』(昭和五年 明治書院)
- (24) 「枕草子の文体の魅力」(『國文学』昭和四二年六月)
- (25) 「枕草子の文章」(『文学・語学』49 昭和四三年九月)
- (26) 「『枕草子』における「語る」文芸の成立」(『国語と国文学』昭和四三年八月)
- (27) 「枕草子における自讃談」(『言語と文芸』70 昭和四五年五月)
- (28) 『無名草子』の引用本文は、新潮日本古典集成本による。
- (29) 「枕草子の記事並に著作の年代」(『日本及日本人』明治四二年五月)
- (30) 「枕草子の成立時期についての考察」(『国語と国文学』昭和二一年三月)
- (31) 「枕草子の史実の文の年代について(上・下)」(『国語国文』昭和一四年二月、三月)
- (32) 「日記的の章段の鑑賞」(『枕草子必携』昭和四二年 学燈社) 各章段の中では「大進生昌が家に」の段における「わらふ」の語の多出にも注目している。
- (33) 「枕草子の一考察—長保二年の記事と史料をめぐる—」(『女子大國文』昭和四四年一月)、「枕草子における和歌記載の一考察」(『女子大國文』昭和四七年一月)
- (34) 「試論—枕草子の周辺をめぐる—」(『平安文学研究』昭和五二年六月 以降順次掲載。後に『枕草子周辺論』、『続枕草子周辺論』として笠間書院より出版)
- (35) 「悲哀の文学—枕草子の一面—」(『国語国文』昭和四〇年一〇月)
- (36) 新潮日本古典集成『枕草子 上・下』(昭和五二年四月、五月 新潮社)
- (37) 「枕草子を支えたもの—書かれなかった「あはれ」をめぐる—(上)、(下)」(『文芸と批評』昭和四九年一月、昭和五〇年八月)『枕草子 表現の論理』(平成七年 有精堂)に「枕草子の沈黙—「あはれ」と「をかし」—」として改稿所収)
- (38) 「枕草子の虚構性」(『枕草子講座I』昭和五〇年 有精堂) 「枕草子「職の御曹司におはします頃」章段の性格」(『国文学研究』昭和五五年三月)、「枕草子の表現構造—「日ざし」と宮仕え讃美と—」(『中古文学』昭和五五年四月)、「枕草子の〈問〉と〈答〉—日記的章段の論理をめぐる—」(『国語と国文学』昭和六三年一月)等々、いずれも『枕草子

表現の論理』(前掲注(37))に所収。

- (39) 「枕草子の明るさの一考察」(『愛媛国文研究』14 昭和三十九年二月)
- (40) 「『枕草子』日記的章段の笑いについての一試論」(『平安文学研究』昭和五二年六月)、『源氏物語 両義の糸』平成三年有精堂 所収)
- (41) 原岡論を継承し、「笑ひ」と「をかし」の用法を分析した論には、上丸恵都子「枕草子への一視点―日記的章段の位相―」(『金沢大学国語国文』昭和五八年三月)、沢田正子「枕草子の笑いとをかし」(『平安文学研究』昭和五九年一月)、『枕草子の美意識』昭和六〇年笠間書院 所収)がある。
- (42) 「枕草子」かへる年の二月二十余日」の段の位相」(『国文学研究』80 昭和五八年六月)、「枕草子・藤原齊信関係章段の位相―故殿の御服のころ―」(『故殿の御ために』の段を中心に―)、『中古文学論攷』6 昭和五八年二月)、「枕草子日記的章段の讚美の構造―朗詠と伊周像をめぐって―」(『中古文学論攷』昭和六〇年一〇月)、「枕草子日記的章段の方法―中関白家盛時の記事をめぐって―」(『中古文学』昭和六一年六月)
- (43) 「枕草子の方法―和歌からの逸脱―」(『國學院雑誌』昭和六一年八月)、「清少納言と和歌―日記的章段の位相―」(『日本文学』昭和六三年五月)、「枕草子と和歌の機能―」(『職御曹司』章段の特質)、『静岡英和女学院短期大学紀要』32 平成一二年二月)
- (44) 「枕草子の笑いと回想」(『古典文学論注2』平成三年九月)、「枕草子」演劇的空間」の方法の変容」(『古典文学論注2』平成四年一〇月)、「枕草子の「回想」―へなし」とへかたりの位相―」(『古代文学研究第二次』2 平成五年一〇月) 加藤静子「『枕草子』日記的章段の一考証」(『平安文学研究』昭和五五年七月)
- (45) 前掲注(38)「枕草子の虚構性」
- (46) 「『枕草子』南の院の裁縫」の条の事件年時について(上、下)」(『語文』84、85 平成四年二月、平成五年三月)
- (47) 「反転するまなざし―虚構性について―」(『枕草子 表現の論理』(前掲注(37))の注記には、初出論文である「枕草子の虚構性」(前掲注(38))への坏の反論に対する反論を載せ、さらに最近の論文(後掲注(83))で坏が返している。
- (48) 「枕草子の表現史―王権と古今和歌集受容をめぐって―」(『野州国文学』昭和六三年二月)、「枕草子の表現と定子後宮」(『日本文学』平成二年九月)、「枕草子の「時間」―正暦期日記的章段群攷―」(『静岡英和女学院短期大学紀要』23 平成三年二月)
- (49) 「物語の場としての宮廷―『枕草子』の場合―」(『日本文学』平成四年三月)
- (50) 「枕草子の聖代観の方法―陰陽の變理」の觀念を媒介にして―」(『国語と国文学』平成五年九月)
- (51) 「『枕草子』の言葉と方法―時間をめぐって―」(『国語と国文学』平成三年一月)
- (52) 「枕草子の〈笑ひ〉と〈語り〉」(『物語・日記文学とその周辺』昭和五五年 桜楓社)、『枕草子 表現の論理』(前掲注(37)) 所収)
- (53) 「枕草子の表現と和歌」(『日本文学』昭和六〇年四月)

- (55) 「枕草子自賛譚の構造 — 能因本八十六段を中心として —」  
 『江戸川女子短期大学紀要』平成元年二月、「枕草子自賛譚の構造 (二) — 三巻本九十八段を中心として —」(『江戸川女子短期大学紀要』平成二年三月)
- (56) 「「里にまかでたるに」段の本質 — 橋則光との交流をめぐる —」(『常葉国文』15 平成二年一〇月)、「離越しの歌語り — 「三条の宮におはしますころ」の段をめぐる —」(『常葉国文』16 平成三年一〇月)、「いずれも『枕草子研究』(平成一四年 風間書房) に所収。
- (57) 「定子晩年章段の語りと表現 — 日記的章段のかたち」(『國文學』平成八年一月)
- (58) 「枕草子の祝祭的時空 — 「供儀」としての翁丸 —」(『日本文学』平成四年五月)、「異化するテクスト枕草子 — 「大進生昌が家に」の段をめぐる —」(『日本文学』平成五年一二月)等、「いずれも『枕草子 逸脱のまなざし』(平成一〇年 笠間書院) に所収。
- (59) 「「ほととぎす」から「下蕨」 — 清少納言の意図した非和歌的世界志向 —」(『国語国文論集』平成八年一月)、「清少納言の返りごと — 「草の庵をたれかたづねむ」をめぐる —」(『国文学攷』平成八年九月)、「「この君にこそ」という発言 — 典拠の「空宅」と清少納言 —」(『国語と国文学』平成九年二月) 等。
- (60) 「枕草子一五七段の読み — 章段構成について —」(『国文目白』平成元年一月)、「枕草子 表現と構造」平成六年 有精堂 所収)、「枕草子の打聞撰取 — 定子と清少納言の語る打聞 —」(『金沢大学国語国文』平成一〇年二月) 等。
- (60) 「枕草子「浜は」の段についての考察」(『語文』平成二年三月) は枕草子が和歌的背景より歌謡や物語にウエイトを置いた可能性を論じたもの。「歌枕への挑戦 — 類型章段の試み」(『国文学』平成八年一月) は和歌文学の伝統・類型を脱して地名の持つ記号性を追求する作者の自由な立場を考察するもの。
- (62) 「枕草子「ことなし草」攷 — 忍草の実体にもふれつつ —」(『園田語文』平成六年三月) は枕草子の独自性が和歌の伝統に馴染まなかったことを考察したもの。
- (63) 「枕草子「ももの」型章段における類聚段の性格 — 脱和歌の方法として —」(『中古文学論攷』平成六年一二月)、「枕草子と歌の恋歌的性格について — 「宮の五節出ださせたまふに」段を中心に —」(『中古文学論攷』平成八年一二月) 等、「いずれも『枕草子 表現の方法』(平成一四年 勉誠出版) に所収。
- (64) 「和歌からの離陸 — 「枕草子」の形態 —」(『日本文学誌要』平成元年二月)
- (65) 「『枕草子』の宮廷文学的性格 — 「とりのそら音」をめぐる —」(『常葉国文』17 平成三年一二月)、「枕草子研究」(前掲注 (56)) 所収)
- (66) 「『枕草子』における「歌語り」あるいは「歌咄」 — その「地の文」のあり方」(『國學院雑誌』平成二年二月)
- (67) 「物語史の中の〈草子〉 — 〈草子〉の転機としての『枕草子』 —」(『古代文学研究第二次』平成一三年一〇月)
- (68) 「『枕草子』の性格 — 女房日記とのかかわり —」(『女房日記の論理と構造』平成八年 笠間書院)、「『枕草子』 — 日記と

- のかかりー」(『王朝女流日記 文学の形象』平成一五年お  
うふう)
- (69) 「枕草子の〈内なる政治〉」(『帝塚山学院大学日本文学研究』  
31 平成一二年二月)
- (70) 「『枕冊子』枕考ー視点と時点における「枕」の意義ー」  
『古代文学研究第二次』9 平成一二年一〇月)
- (71) 「つれづれなる里居」考ー『枕草子』跋文をめぐってー」  
『女子聖学院大学紀要』30 平成元年三月)
- (72) 「枕草子の跋文ー「書きつく」という行為をめぐってー」  
『国語国文論集』平成九年三月)
- (73) 「「わが思ふ事を書く」ことー能因本枕草子の筆付きー」  
『源氏物語と古代世界』平成九年 新典社)
- (74) 「類聚化する「枕草子」(一)、(二)」(『王朝文学史稿』12、13  
昭和六〇年一月、昭和六一年三月)、「『枕草子』類聚形式  
に内在する誘発性ー「病は」章段攷ー」(『國學院雜誌』90  
9 平成元年九月)、「『枕草子』における「連想」の問題ー  
「なまめかしきもの」を中心にー」(『國學院大學大学院紀要』  
22 平成三年三月)
- (75) 「『枕草子』の内的連絡ー読者としての和辻哲郎ー」(『日  
本文学』平成七年九月)は、和辻哲郎の有名な枕草子論  
「『枕草紙』に就ての提案」(『国語と国文学』大正一五年四月)  
を改めて掲げ、枕草子という作品の持つ読者との関係におけ  
る流動性を確認したものである。
- (76) 「枕草子の祝祭的時空ー「供儀」としての翁丸ー」(『日本文  
学』平成四年五月)、「枕草子 逸脱のまなざし」平成一〇年  
笠間書院 所収)
- (77) 「枕草子跋文の喚起力」(『日本文学』平成一〇年五月)
- (78) 「動態としての『枕草子』ー本文と作者とー」(『國文(お茶  
の水女子大学)』91 平成一二年八月) 永井は翌年、枕草子執  
筆の内的動機を清少納言の中宮との出会いとし、初出仕の意  
味を考察している(『清少納言ー基点としての「宮」はじめ  
てまゐりたるころー』『解釈と鑑賞』平成一二年八月)が、  
作者の特定に疑問を提出する当該論文との関わりは明らかで  
ないように思われる。
- (79) 「枕草子日記的章段の沈黙の構造ー「上にさぶらふ御猫は」  
をめぐってー」(『常葉国文』平成四年六月)、「枕草子ー省  
筆の魅力ー」(『語学と文学』29 平成五年三月)、「読者論と  
してー鏡としての枕草子」(『國文学』平成八年一月)等、  
いずれも『枕草子研究』(前掲注(56))に所収。
- (80) 「解説ー枕草子研究史ー」(『日本文学研究資料新集 4 枕草  
子 表現と構造』平成六年 有精堂)に詳しい解説がある。
- (81) 「『紫式部日記』清少納言批評の背景」(『古代文化』53-9 平  
成一三年九月)
- (82) 「「異説・枕草子」少納言の名に関する一考察ー『紫式部日  
記』を手掛かりとしてー」(『古代文学研究第二次』10 平成  
一三年一〇月)
- (83) 「『枕草子』「長徳の変」関連章段の解釈ー後宮の視点によっ  
て描かれた政変ー」(『中古文学』71 平成一五年五月)
- (84) 「五月五日の定子後宮ーまだ見ぬ御子への予祝」(『物語研究』  
平成一五年三月)
- (85) 平成七年の三田村雅子『枕草子 表現の論理』(前掲注(37))  
をはじめ、平成一〇年に小森潔『枕草子 逸脱のまなざし』

〔前掲注(76)〕、平成一四年に鄭順粉『枕草子表現の方法』〔前掲注(63)〕、藤本宗利『枕草子研究』〔前掲注(56)〕が相次いで刊行されている。

(86) 『枕草子大事典』枕草子研究会編(平成一三年 勉誠出版)

(87) 野村精一「作品論・作家論―その評価をめぐって」、『文学史論―その史的位罫について』(『諸説一覽枕草子』塩田良平編 昭和四五年 明治書院)、『日本文学研究史論』昭和五八年 笠間書院 所収)、三田村雅子「解説―枕草子研究史―」〔前掲注(80)〕、加藤裕一郎・五十嵐正貴「枕草子・徒然草・方丈記研究文献目録抄―平成元年以降―」(『解釈と鑑賞』平成六年五月)、小森潔「枕草子研究の現状と展望」(『枕草子逸脱のまなざし』〔前掲注(76)〕)